

理研と産業界との交流会 ネットワーク生かし新技術・新産業の創出へ

日本の科学技術をリードする理化学研究所と、技術系企業約100社による情報交換と課題共有を目的とする「理化学研究所と産業界との交流会」(第39回)が2月20日、東京都内ホテルで開催された。

主催は一般社団法人理研未来革新アライアンス(会長＝足立正之(株)堀場製作所代表取締役社長)。冒頭あいさつした足立会長は「本日は理研の最先端の研究成果が多数紹介される。



確に培い革命を長
理研の五神理事
「生成AIは、何百年もの間に
「科学」そのもの
「研究」など話す
「AI時代?その激動をチャンスに」、理研
計算科学研究センター長の松岡聡氏が「富岳
NEXTに向けたHPCの新時代・シミュレ
ーション・AI・量子計算の融合と産業への
インパクト」、一橋大学経営管理研究科教授
の大藪恵美氏が「オ리지ナリティと競争力」
をテーマにそれぞれ講演した。

講演の部に引き続き、情報交換会が行われ、文部科学省から松本洋平大臣、小林茂樹副大臣、清水真人大臣政務官らが出席。松本大臣は産業界に対して積極的な研究開発投資を求めた上で、「文科省としては、新たな学術領域を切り拓き、革新的なイノベーションの種を生み出す取り組みを絶え間なく支援することとで、我が国の経済成長や世界的な社会課題の解決に貢献していきたい」と述べた。



情報交換会に出席した(左から)小林副大臣、足立会長、松本大臣、五神理研理事長、清水政務官、増子文部科学事務次官、大井副会長



理研の小谷元子氏(左)と話し込む小林副大臣



理研の松岡聡氏(左)による説明を熱心に聞く松本大臣



淵上研究振興局長(左)



理研の研究者から説明を聞く清水政務官(左)

五神理研理事長

「日本を再び世界の中枢へ」

交流会第2部「情報交換会」の冒頭、理学研究所の五神理研理事長があいさつした。あいさつ概要は次のとおり。

「私たちは今、人類史の大きな転換点に立っている。『かつてない』『史上初』という言葉が日常的に飛び交う時代だ。とりわけ、2月8日の衆院選挙は日本の針路に大きな変化をもたらした。失われた30年という長い停滞期を乗り越えて、高市総理のもとで新しい国家成長戦略を本格始動することに大きな期待を寄せている。中でも、17の戦略分野の重点投資は、科学技術を国家の中核に据えるという明確な意思表示。それぞれの戦略分野を有機的に関連させ、これを日本再興のためのグランドパッケージとして機能させることが重要だと思っている。それが実現するとき、日本は真の成長モードへと転換できるはずだ。

この国家戦略を支える科学の世界もいま、歴史的な変革期にある。生成AIはかつてない速度で進化と社会実装が進み、AI for Scienceの進展も加速している。ただ、AI for Scienceは単なる研究の効率化ではない。



五神理研理事長

人類が担ってきた知識創出の主体、方法、スケールそのものにパラダイムシフトをもたらすものであると感じている。この変化は科学研究にとどまらず、その成果の上に立つ社会・経済全体の構造転換へと直結する。この大変革を正しくとらえ、日本が次の時代を主導する立場を確立すること。それが今の産業戦略、科学技術政策の核心であり、理研としては責任を持って貢献していきたい。

しかし、この歴史的变化への対応は一国だけではなしえない。米国は昨年11月、大統領令として『Genesis Mission』を発表し、科学研究の生産性倍増を掲げている。その中核に位置付けられているのがAI for Scienceであり、それを支える最先端の計算基盤を国家規模で整備する構想が進められている。本年1月、文科省はこの取り組みについて、日米連携への協力を表明した。理研は富岳NEXTの開発が本格化する中で、開発のパートナーであるエヌビディア、富士通、米アルゴンヌ国立研究所との4者協力協定を締結した。グローバルな科学のプラットフォームをとものに構築するというビジョンを掲げている。

科学研究にはAIという強力な加速装置が組み込まれた。基礎研究の成果を待つから産業が動くという時代ではもはやない。研究現場そのものが産業の最前線であり、企業が直面する課題こそが基礎科学の新たな問いともなる。このダイナミックな知の循環を実装することこそが理研未来革新アライアンスの目指す姿だ。そして、それは国家成長戦略とも軌を一にしている。日本の科学力を戦略的不可欠なものとして世界に示し、米国をはじめとする同志国との連携を通じて日本の産業競争力を再び世界の中枢へと押し上げる。そのため、この場を皆さまとともに築いていきたい」